

指揮者のお話

●指揮者の登場

集団で音楽を演奏するには、全体を統率する人が必要になり、その役目が一般には指揮者と呼ばれます。指揮者が舞台上に登場すると聴衆は大きな拍手で迎えますが、それは指揮者独自の解釈が加えられたものをオーケストラが鳴り響かせることへの期待の表れでもあるのです。

●指揮者の歴史の変遷

紀元前のギリシャ、指揮者は右足に鉄片をつけて、それを打ち鳴らして拍を取っていたそうです。劇場が野外にあることが多かった時代、例えば、今に残る古代遺跡を思い浮かべると容易に想像できるのですが、石づくりの巨大空間の中、確かに打ち鳴らす音ももっとも聞こえやすかったのでしょうか。足を踏み鳴らすほか、手を打って指揮をする方法もあったようです。

9世紀ごろ、楽譜のないグレゴリオ聖歌を歌うには、指揮者はメロディーの流れ、上行、下行を手の動きで表現して、音の高さ、長さを示していたようです。合唱団が歌い継がれてきた聖歌を指揮者の手の動きに合わせて歌う。それが聖堂に厳かに鳴り響く、音の高さが厳密ではなく、メロディーの流れもおおよそで、それはまさに、キリストという1人の人物に罪を委ねる、救いの宗教に相応しいかのような寛かさを感じさせます。

ただし、メロディーの出だしは揃える必要はあります。そのため指揮棒を左手に持って拍をあわせることもしました。すなわち、指揮者は一拍目に指揮棒を下げ、そして2拍目には手をあげるといように、両手を使って合唱団に拍子とメロディー線の大体の動きを知らせていたのです。

●3人または2人

18世紀には通奏低音を担う鍵盤楽器奏者が、演奏しながらオーケストラを指揮するようになりました。作曲家本人が演奏しながら指揮をしない場合や管弦楽が大きい場合は、主指揮者の役割を担うのはヴァイオリン奏者、さらに全体をまとめる指揮者がもう1人いるというように、舞台上に3人の「指揮者」がいたこともあったとか。作曲家本人が指揮をする場合は指揮者の数が減り、再現芸術としての質は高いものになったのは確かです。ただしそれが音楽史の発展に偏りを起こしていたことも事実です。創造者の死が作品の忘却を引き起こす場合もありました。そのもっとも有名な例がバッハの「マタイ受難曲」でしょうか。

市川市文化振興財団 音楽総合プロデューサー 小坂 裕子

●メンデルスゾーンの登場

19世紀メンデルスゾーンが指揮者の重要性を世に知らしめました。「マタイ受難曲」はもちろんのこと、シューベルトの死後、その交響曲の初演、そしてさらに同時代の作品を積極的に演奏することで、音楽史の充実をはかりました。さらに過去ばかりでなく未来を見据えて、演奏家を育てるための音楽院設立からオーケストラ指導に尽力し、そのいずれも今に名を残すライブツィヒ音楽院でありゲヴァントハウス管弦楽団となったのです。ロンドンで舞台に立ったとき、団員たちが見やすいようにと白い指揮棒を手にし、演奏速度は流麗に聞こえるように少し速めに、といった工夫にも怠りはなかったそうです。

●ベルリオーズ

「幻想交響曲」の作曲家ベルリオーズも指揮者として、その名を残しています。ベルリオーズは指揮をするときに、目で奏者たちと意思疎通をはかるべきだと強調しています。手では伝えられないニュアンスを目くばりすれば、リハーサルでの注意を喚起できると語っています。「目は口ほどに」はまさに、指揮の現場でも言えることなのですね。

●指揮者の権威

「オーケストラは専門の指揮者の指示に従わなければならない」というルールができたのは、メンデルスゾーンやベルリオーズが活躍した19世紀後半です。指揮専門の権威ある最初の指揮者というとドイツのハンス・フォン・ビューローです。彼は作曲家や演奏家を兼任することはありませんでした。ワーグナーに心酔し「トリスタンとイゾルデ」「ニュルンベルクのマイスタージンガー」の初演、チャイコフスキーのピアノ協奏曲の初演、さらにブラームス作品を積極的に取り上げ、まさにコンサート内容の充実に変な貢献をしました。熱心に作品研究をし、オーケストラ指導のみならず演奏前にはプレトークをするなど、聴衆の啓蒙にも努力をしたことが伝えられています。

●何拍子でしょうか？

さて最後に基本的指揮パターンの中から。これは何拍子の指揮でしょうか？この拍子を使ったものに、さまざまな楽器編成で演奏されるフォーレの名曲「シチリアーノ」があります。

